

第26回函館イルミナシオン

シナリオ大賞

最終候補作品

翼

桐乃さち

登場人物

高田信司（22）（34） アルバイト

伊藤美緒（29） 主婦

高田夏美（21） 高田の妻

伊藤健介（35） デイトレージャー

宮地達郎（54） ガソリンスタンド経営

宮地美子（53） ガソリンスタンド勤務

野田徳郎（53） 弁護士

バックパッカーの男性

ガソリンスタンドの男性従業員

ガソリンスタンドの男性客

ガソリンスタンドの女性客

キャンプ場の管理人

アナウンサー

警察官

医師

看護師

検事

映画館の店員

刑務官

あらすじ

高田信司は、12年前の地震による津波で妊娠中の妻を亡くして以来、キャンピングカーで各地を転々としながら生活をしている。誰にも心を開かず、孤独に暮らしている。

ある日、職場のガソリンスタンドで、耳が聞こえない伊藤美緒と出会う。亡くなった妻も聴覚障がい者だったことから、高田と美緒は距離が近づいて行く。

美緒は夫からDVを受けているようだった。美緒を心配する高田だが、亡くなった妻への罪悪感から踏み込めないでいた。

そんなある日、夫の暴力から逃れて来た美緒を高田は助ける。美緒は怪我をして、ひどく怯えていた。美緒は実家に連れて行って欲しいと言うが、そこは海に近い函館の街だった。妻を失って以来、海に近づいていない高田は迷うが、美緒の為に行くことを決意する。

高田は美緒に、震災で妻子を失ったことを話す。美緒は夫の子供を妊娠していた。高田

は、美緒を守る決意をする。

しかし、美緒から、夫から暴力を振るわれそうになった時に、とっさに包丁で刺してしまつたと告白される。

高田は、何が何でも美緒を助けたいと考える。高田は警察の追手から逃れながら、美緒の実家を目指す。実家に着くと、美緒の母親は亡くなっていた。美緒の夫は、そのことから美緒に伝えていなかったのだ。

絶望した美緒は、海に身を投げて死のうとする。高田は妻を津波から助けられなかった無念を思い出し、必死で美緒を救出する。

高田と美緒は一命を取り留める。美緒は捕まり、高田も犯人隠匿罪に問われる。

高田はキャンピングカーの生活に戻る。再び一人になってしまった喪失感に、高田は打ちのめされる。高田は、妻の代わりではなく、美緒自身を愛しているのだと気が付く。

高田は亡くなった妻に別れを告げ、美緒と生きていく決意をする。

○（イメージ）海 砂浜（朝）

無数の木の破片が押し寄せている。瓦礫に乗り上げ、座礁している船。

高田信司（22）、歩いている。高田

夏美（21）が瓦礫の中に立っている。

高田「夏美？」

高田、瓦礫を押しつけて歩き出す。夏美が振り返る。夏美、お腹が大きい。

高田「夏美！ 今まで、どこにいたんだよ！」

高田、「生きてたのか？ 今までどこにいたんだ？」と手話する。

夏美の姿が消える。

○札幌 道の駅 駐車場（朝）

大きなキャンピングカーの車内。小さなベッドに、高田（34）が寝ている。

高田、汗だくで起きる。高田、ベッド脇についている小さな窓を開ける。朝

日が差し込む。

○同 駐車場 全景（朝）

「北欧の風 道の駅とうべつ」と書かれた看板。広い駐車場に、キャンピングカーやワゴン車が止まっている。

○同 車内（朝）

高田、洗面所で顔を洗っている。洗面所脇の棚には、夏美の写真。

○同 給水所（朝）

高田、ポリタンクに水を汲んでいる。大きなリュックを背負った男性が近づいて来る。

男性「すみません、こちらの方ですか？」

高田「……」

男性「僕、東京からで、ヒッチハイクして北海道を回ってるんです。もし良ければ、乗せて行っていただけませんか？」

高田「悪いけど、人は乗せないんだ」

高田、ポリタンクを持って車に戻る。

○道（朝）

キャンピングカーが走っている。

○ガソリンスタンド 全景（朝）

広いガソリンスタンド。ぼつぼつと給油している車が止まっている。

○同 出入口（朝）

高田の運転するキャンピングカーが入って来る。宮地達郎（54）、車の整備をしている。

○同 駐車場（朝）

キャンピングカーが止まっている。建物の中から、宮地美子（53）が出て来る。美子、キャンピングカーの窓をノックする。高田、窓を開ける。

美子「信ちゃん、おはよ！」

高田、頭を下げる。

美子「朝ごはんまだでしょ？ 仕事始める前

に食べちゃって」

美子、アルミホイルの包みを渡す。

高田「いつもすみません」

美子「ゆっくりでいいからね。あのね、うちの人が、お昼休み話があるって」

高田「話？」

高田、宮地の方を見る。宮地、軽く手を挙げる。高田、会釈をする。

美子「たまにはご飯、付き合ってやってよ」

美子、立ち去る。高田、包みを開ける。大きなおにぎりが2つ入っている。

○同 フィールド

高田、車を洗車している。車が入って来る。高田、水を止めて誘導する。

高田「オーライ！ オーライ！」

男性客が窓を開ける。

男性客「ハイオク満タン。あとこれ」

男性客がゴミの入った汚い袋を高田に押し付ける。ゴミがこぼれる。

高田「……」

男性客「何？」

高田「いえ」

高田、黙ってごみ进行处理する。

○ラーメン屋「龍翔」 全景

「ラーメン 龍翔」と書かれた看板の
ある、古い店。

○同 店内 カウンター席

カウンターだけの小さな店。高田と宮
地、座ってラーメンを食べている。

宮地「最近、どうだ」

高田「どうって」

宮地「こっちの生活、慣れたか」

高田「……どこにいても一緒ですから」

宮地「風呂とか飯とかちゃんとやってんのか」

高田、黙ってラーメンをすすする。

高田「子供じゃないんですから」

宮地「ふん。俺あ、車なんかで暮らす奴の気

が知れねえな」

高田、ラーメンをすすする。

宮地「落ち着くつもりはねえのか？」

高田「落ち着く？」

宮地「ちゃんとしたアパート借りてさ」

宮地、ポケットから紙を取り出してテ

ーブルに置く。アパートの間取り図。

宮地「知り合いのアパートだ。安くしてくれ
るってさ」

高田「……」

宮地「もう12年だ。いつまでもお前がそん
なんじゃ、嫁さんも心配するぞ」

高田「……」

宮地「お前はよくやってくれてるし、これか
も長く働いて欲しいと思ってるんだ。俺は
な……」

高田「ありがとうございます」

宮地、何か言おうと口を開ける。

高田「ほんとです。俺もいい加減、前に進ま
なきゃって思ってるんです」

高田、間取り図をきちんと折りたたんでポケットに入れる。

○ガソリンスタンド フィールド

高田と宮地、歩いて来る。美子が建物から出て来る。

美子「おかえりなさい！ 何食べて来たの？」

宮地、黙って立ち去る。

美子「信ちゃん、あの人、ちゃんと話してくれた？」

高田「はい」

美子「返事、急がないからね。私達、あなたのこと息子みたいに思ってるんだから。

ね？」

高田、黙って会釈をする。

赤い軽自動車が入って来る。男性従業員が車に駆け寄る。

男性従業員「オーライ、オーライ！」

高田、車に貼られた聴覚障害者標識に気が付く。

伊藤美緒（29）が運転席に座っている。美緒、車の窓を開ける。

美緒、メモ用紙を取り出す。そこに

「レギュラー満タンでお願いします」と書かれている。

男性従業員「え？ 何すか？」

美緒、自分の耳を指差し、手を合わせて頭を下げる。

男性従業員「あ、なるほど」

男性従業員、給油作業をする。

高田、美緒の車を見ている。美緒、料金を払って出発の準備をしている。

高田、車に駆け寄る。

美緒「？」

高田、タイヤを見つめる。

高田「（手話）タイヤ、パンクしてるかもしれない」

美緒「！（手話）手話、出来るんですか？」

高田「（頷く）（手話）道具取って来るからちょっと待ってて下さい」

高田、建物の方へ走る。美緒、慌てて窓をコツコツと叩く。

美緒「（手話）待って！ 時間が無いんです」

高田「（手話）でも、このままだと危ないで

すよ」

美緒「（手話）家、すぐ近くだから」

高田「（手話）事故起こしてもいいのか」

美緒、困ったように俯く。美緒の腕に

あざが出来ている。高田の視線に気が

付き、美緒は痣を隠す。

ハンドルの横に取り付けられたスマホ

が光りながら震える。美緒、慌ててス

マホの画面を見る。

美緒「（手話）すみません、本当に急いでるんです」

美緒、申し訳なさそうに手を合わせる。

美緒、窓を閉めようとする。

高田、窓をノックする。

美緒、窓を開ける。

高田「（手話）運転してて、変だったらすぐ

その場で止まって。メールしてくれたら、
修理行きますから」

高田、名刺を渡す。

美緒、手話で「ありがとう」。

美緒、慌てた様子でエンジンをかける。

高田、出て行く美緒の車を見つめる。

○道の駅 駐車場（夜）

ぽつぽつと止まったキャンピングカー

やワゴン車から、明かりが漏れている。

○同 車内（夜）

高田、ベッドに寝転んで間取り図を見
ている。外から子供の声が聞こえる。

高田、窓の外を見る。楽しそうにトラ
ンプをしている家族連れ。

高田、間取り図を放り出して、カーテ
ンを閉めて布団に潜り込む。

○ガソリンスタンド フィールド

土砂降りの雨。

○同 建物 中

高田、カウンター内で作業をしている。

男性従業員、びしょ濡れで入って来る。

男性従業員「すごい雨っすね！」

高田「香川さんの車検出張見積もり、今日じ

やなかつたか？」

男性従業員「あー、やべ！ 忘れてました」

高田「いいよ、俺が行って来る」

男性従業員「すみません！」

高田、合羽を羽織り、建物を出る。

○同 駐車場

高田、トラックに乗り、発進させる。

○田んぼ 道

土砂降りの中、高田の運転するトラッ

クが走っている。

○同 車内

高田、運転している。赤い軽自動車が路肩に止まっている。傘を差した女性が、しゃがんでタイヤを見つめている。高田、トラックを止める。

○同 道

高田、トラックから降りる。傘を差した美緒が、途方に暮れて立っている。

高田、美緒の肩を叩く。

美緒、驚いて振り向く。

高田、「パンクしたのか？」と手話する。美緒、困った顔で頷く。

高田「事故にならなくて良かった」

高田、傘の中の美緒の顔を見て驚く。

美緒、眼帯をしている。

唇の端が切れて赤くなっている。

高田、戸惑いつつ、タイヤを確かめる。車が通り過ぎる。水が美緒にかかる。

高田「（手話）応急措置するから、車の中に

入っててください」

高田、ためらう美緒の肩を押して、車に乗せる。

高田、タイヤの修理を始める。

○同 車内

美緒、両手をこすり合わせている。窓がノックされる。美緒、窓を開ける。

高田、「穴を塞いで空気入れました」と手話する。

美緒、「ありがとう」の手話。

高田「（手話）トラックの後ろゆっくりついて来れますか？」

美緒「？」

高田「（手話）スタンドでタイヤ交換しましょう」

美緒「（手話）主人に連絡してもいいですか？」

高田、頷く。

美緒、メールを打つ。「連絡遅れてご

めんなさい」

すぐ返事が来る。「今、どこ？」

美緒、返事を打つ。

「家の近く。ガソリンスタンドの人が
通りかかって助けてくれた。やっぱり、
パンクしてたみたい」

返事が来る。「すぐ帰って来い」

美緒、メールを打つ。

「新しいタイヤに替えないといけない
んだって」

「だめだ。帰って来い」

高田、頭をかいて美緒の肩を叩く。

高田「奥さん！ 俺が説明しますよ」

美緒、首をかしげる。

高田、電話のジェスチャー。

高田「（手話）旦那さんは耳、聞こえます
か？」

美緒、頷く。高田、手を出す。

美緒、ためらいつつ、通話ボタンを押
してスマホを渡す。

伊藤の声「何だ？　おい、どうした？」

高田「もしもし。高田と申します」

伊藤の声「誰？」

高田「ガソリンスタンドの者です。ちょうど通りかかったんです」

伊藤の声「……ああ。うちのがすみませんね」

高田「タイヤ、このままだと持たないですよ。スタンドで、新しいタイヤと交換してもいいですか？」

伊藤の声「すみませんが、ちよつと予定がありました」

高田の声「予定？」

美緒、車の中から心配そうに高田を見つめている。

高田「そんなにお時間かかりませんか」

伊藤の声「応急措置してくれたんですよ」

高田「まあ、はい」

伊藤の声「今すぐ替えないといけないって訳じゃないんでしょう？　今度、改めて私が伺いますので」

高田「いや、でも」

伊藤の声「家まですぐですから。とりあえず妻を帰してもらえませんかね。急いでるんですよ」

高田、美緒を見つめる。

美緒、寒そうに肩が震えている。

高田「……こんな雨の日に奥さんが立ち往生してるって言うのに」

伊藤の声「何だって？」

高田「タイヤ、本当にパンクしたら大きな事故になるかもしれないですよ？奥さんの命よりも大事な用事なんてあるんですか？」

美緒、目を見開いて高田を見つめる。

○伊藤家 全景

土砂降り。住宅街。大きな一戸建て。

「伊藤」と書かれた表札。

○同 伊藤の部屋

パソコンが三台置かれた部屋。伊藤健

介（35）が椅子に座って電話をしている。パソコンには株の取引画面が映っている。伊藤、苛立たし気にマウスを何度もクリックする。

高田の声「もしもし、もしもし？」

伊藤、スマホを壁に投げつける。スマホの画面が割れて床に落ちる。

○田んぼ 道

土砂降りの中、高田、目を見開いて電話を見つめる。高田、車の中の美緒にスマホを返す。

高田「（手話）電話、切れました」

美緒、不安そう。

高田「（手話）家に帰って来るようにおっしゃってました。すみません、俺、余計な事言っちゃって」

美緒、「すみません」と手話。

美緒「（手話）帰らないと……。今度、タイヤ交換行きます。今日の修理代もその時で

大丈夫ですか？」

高田「（手話）でも、本当に危ないですよ」

美緒、頭を振る。

高田、ぽりぽりと頭をかく。

高田「（手話）お名前だけ、いいですか？」

美緒、「伊藤美緒です」と手話。

高田「（手話）俺の名前は……」

美緒、ダッシュボードから名刺を取り出して見せる。

高田「（手話）俺、昼は大体スタンドにいます。なるべく早目に来て下さいね」

美緒、頷いて窓を閉める。

高田、美緒の顔の傷を見つめる。

美緒、エンジンをかける。

高田、窓を叩く。

美緒、首をかしげて窓を開ける。

高田「（手話）家まで送って行ってもいいですか？」

美緒「？」

高田「（手話）タイヤ、本当に危ないんで。」

無事にお家に着くの見届けたら、すぐ帰りますから」

美緒、迷うように目を泳がせる。

高田、手を伸ばして美緒の車のエンジンを切る。

美緒「！」

高田「（手話）それが出来ないなら、このまま行かせるわけにはいきません」

美緒「……」

高田「（手話）事故を起こしてからじゃ遅いんだ」

美緒、納得して頷く。

美緒「（手話）すみません。お願いします」

高田「（手話）俺は後からついて行きます」

高田、後方のトラックに乗り込む。

○道

土砂降りの中を、赤い軽自動車とトラックが連なって走っている。

○伊藤家 前の道

高田、家の前にトラックを止める。赤い軽自動車が駐車スペースに止まっている。美緒、高田に向かって頭を下げる。高田、美緒が家の中に入っていくのを見守る。高田、車を発進させる。

○同 リビング

伊藤、窓の前に立っている。伊藤、カーテンを渾身の力で握り締めている。

○道の駅 駐車場（夜）

キャンピングカーが止まっている。

○同 駐車場 車内（夜）

高田、ベッドで寝ている。

○（イメージ）海 砂浜

今にも雨が降り出しそうな空模様。
高田と夏美、砂浜に座っている。

高田、険しい顔で海を見つめている。

夏美、高田の肩を叩き、「どうしたの？」と手話する。高田、頭を振る。

夏美「（手話）あの人のことが気になるの？」

高田、暗い顔で俯く。

高田「（手話）あの怪我……」

夏美「（手話）心配？」

高田「……」

夏美、悲しそうな顔で高田の胸に手を置く。雨がぽつぽつと降り出す。

夏美「（手話）ここに、私以外の人が入って来たのね」

高田「（手話）そんな訳ないだろ。あの人はお前と一緒にで、耳が聞こえないから……」

夏美「（手話）それだけ？」

高田「当たり前だろ」

夏美、悲しそうに笑っている。

高田「俺はお前に会いたいよ。会いたいんだ」

高田、夏美を抱き締める。

○元の道の駅 駐車場（夜）

キャンピングカー車内。高田、ベッドに寝ている。高田の目から、涙が出ている。棚の上の、夏美の写真。

○ガソリンスタンド フィールド

高田、洗車作業をしている。高田、ちらちらと出入口の方を見ている。

○同 建物内 事務所

美子、パソコンに向かって仕事をしている。高田、入って来る。

高田「奥さん、俺宛てにメールとか、来てないですか？」

美子「メール？ ないわよ？」

高田「タイヤの修理依頼とか」

美子「ううん、来てないけど」

高田、フィールドを見ると、赤い軽自動車が入って来る。

高田、慌てて事務所を出る。

○同 フィールド

高田、足早にやって来る。

高田、赤い軽自動車の方へ走る。軽自動車
の窓が開き、女性客が顔を出す。

女性客「レギュラー、満タンね」

高田「……ありがとうございます」

高田、給油タンクを開ける。

○道（夕）

高田のキャンピングカーが走っている。

○同 車内（夕）

高田、運転している。赤信号で止まる。

高田、ウインカーを左に出すが、迷う
ように手を動かし、ウインカーを右に
変える。高田、車を右折させる。

○伊藤家 前の道（夕）

高田、車を止めて家を見上げる。

○同 車内（夕）

高田、首を伸ばして駐車をみつめる。
赤い軽自動車が止まっている。高田、
ハンドルに突っ伏してため息をつく。

高田「俺はストーカーかよ……」

高田、車を発進させる。

○伊藤家 廊下（夕）

薄暗い廊下。美緒が、口から血を流し、
呆然自失の状態で座っている。

○スーパー 店内（夕）

高田、弁当を選んでいる。

○道の駅 駐車場（夜）

キャンピングカー車内。高田、濡れた
髪をタオルで拭いている。テーブルに
は空になった弁当箱のゴミ。

高田、あくびをしてベッドに入る。

○伊藤家 全景（夜）

薄暗い住宅街。

○同 リビング（夜）

カーテンが閉め切られて暗い室内。テーブルの上はカップ麺やコンビニ弁当のごみ。

美緒、タオルで口元を押さえている。血が出ている。

伊藤、部屋に入って来る。

美緒、びくっと肩を強張らせる。

伊藤「美緒、喪服ってどこにあるんだっけ」

美緒、うつろな目で伊藤を見つめる。

伊藤「も・ふ・く。どこ？」

美緒、首をかしげる。

伊藤「クローゼットに無いんだけど」

美緒、「お葬式？」と手話する。

伊藤「ああ、明後日、通夜だそうだ」

美緒「（手話）誰か亡くなったの？」

伊藤「ちよつとな。なあ。喪服」

美緒、部屋を出て行く。

伊藤、苛立たし気に貧乏ゆすり。

美緒、喪服を持って戻って来る。

伊藤「ネクタイと黒い靴下も出しといてくれる？」

伊藤、美緒の顔を覗き込む。

伊藤「ああ、血止まってきたじゃん」

伊藤、美緒の顔を触る。

美緒、顔を背ける。伊藤、美緒の顔を掴んで自分の方に向ける。

伊藤「飯なんか作れる？ コンビニも飽きたしさ。久々に美緒のオムライス食べたいな」

美緒「（手話）……材料、ないよ」

伊藤「スーパー行けよ。って、その顔じゃ無理か」

美緒「（手話）何？ ゆっくり話して」

伊藤「唇読めよ。甘えんな」

美緒「……」

伊藤「いいから、飯」

美緒「（手話）この間病院に行ってきたの」

伊藤「病院？」

美緒「（手話）赤ちゃん。三カ月だって」

伊藤「！ 何だよ、それ」

美緒「……」

伊藤「何で早く言わないんだよ」

美緒「……」

伊藤「へえ、そっか。あはは。子供かあ。俺もついにパパか」

美緒、震える手で手話。

美緒「（手話）携帯、返してくれない？」

伊藤「何だよ、どこに連絡するんだよ」

美緒「（手話）お母さん」

伊藤「は？」

美緒「（手話）子供の事、伝えたいから」

伊藤「お前の母親、病気だろ。手伝いなんか

頼めねえぞ」

美緒「（手話）だからこそだよ、孫の顔を見せたいから……」

伊藤、突然コップを壁に投げつける。

美緒、声にならない悲鳴。

伊藤「んなこと言って、どうせ警察にでも連絡するつもりだろ!?」

美緒、慌てて頭を振る。

伊藤、拳を握り締め美緒を睨みつける。

伊藤「そうやって俺から逃げるつもりなんだろう! 魂胆、見え見えなんだよ!」

美緒、後ずさりする。

伊藤「大体その赤ん坊、本当に俺の子なのかよ」

伊藤、美緒の髪を掴む。

美緒「あー!」

伊藤、拳を振り上げる。美緒、お腹をかばうようにうづくまる。

伊藤、美緒に拳を下ろす。

○道の駅 駐車場（朝）

雀が鳴いている。まだ日が昇りきっておらず、薄暗い。ワゴン車やキャンピングカーが止まっている。

○同 車内（朝）

窓から薄っすらと朝日が差し込んでい
る。高田、ため息をついて何度も寝返
りを打つ。しばらくして、起き上がる。
高田、夏美の写真を見つめる。
高田、髪をかきむしる。

○道（朝）

高田のキャンピングカーが走っている。

○同 車内（朝）

高田、運転している。
前方に警察が車を誘導しているのが見
える。事故車がある。ぐしゃぐしゃに
潰れた赤い軽自動車。
高田、ぎよっとして事故車を見つめる。
救急車が止まっている。

○道（朝）

高田、路肩に車を止めて電話をしてい

る。

高田「はい、すみません。ちよつと立ち寄る所があつて。はい、また連絡します」

高田、電話を切つて車を発進させる。

○伊藤家 前の道（朝）

高田、車を家の前に止める。

○同 車内（朝）

高田、家を見つめる。

赤い軽自動車が止まっている。

高田、ほつとため息をついてエンジンをかける。

家の中から、美緒が素足で飛び出して来る。

高田「え！？」

高田、慌ててキャンピングカーを発進させる。

高田「伊藤さん！」

高田、美緒の横に車を止める。

美緒、体を強張らせて振り向く。美緒の顔は腫れ上がり、腕から血が流れている。美緒、後ずさりする。

高田「どうしたんだ、その怪我!？」

美緒、全身がたがたと震えている。

美緒、怯えた顔で家を見つめる。

高田「(手話) 乗って！」

美緒「！」

高田「(手話) いいから、早く！」

美緒、慌てて助手席に座る。

高田、車を発進させる。

○道 車内(朝)

高田、運転をしている。美緒、怪我をした腕を押さえている。

パトカーとすれ違う。

美緒、体をシートにうずめる。

赤信号で車が止まる。

高田「(手話) とりあえず、病院に行こう」

美緒「！」

美緒、高田の腕を掴み、激しく頭を振る。

高田「だけど……」

美緒「（手話）病院はだめ」

美緒、手を合わせて頭を下げる。

美緒の肩、震えている。

高田、困惑して美緒を見つめる。

○コンビニ 駐車場（朝）

高田、車をコンビニに駐車する。

○同 車内（朝）

高田、慌ててシートベルトを外す。美緒、助手席に座っている。

高田「（手話）怪我の手当て出来るもの買って来ます。その水道で、傷を洗って下さい」

高田、水道を指差して車を飛び出す。

○同 店内（朝）

高田、医療用品の棚からガーゼやテープ、消毒薬等を次々と籠に入れる。

○同 車内（朝）

美緒、水道で腕についた血を洗っている。美緒、棚の上の夏美の写真に気が付く。

高田、入って来る。

高田「（手話）そこ、座って下さい」

美緒、ソファに座る。

高田、袋からタオルを取り出す。

高田「あんまり、上手く出来ないけど」

高田、傷に消毒薬を塗る。

美緒「！」

高田「痛いだろうけど、我慢して」

高田、傷にガーゼを当てる。

高田「とりあえず、応急処置だけ」

高田、唇を指差す。

高田「唇、読めますか？」

美緒、頷く。高田、ゆっくりと話す。

高田「いつも、こんな風に殴られてるのか？」

美緒「……」

高田「しばらくあの家には戻らない方がいい。

少なくとも、旦那さんと2人で会っちゃだ

めだ」

美緒「……」

高田「どこか、身を寄せる場所は？」

美緒「……」

高田「テレビで観たことがあるけど、暴力を

ふるわれている人が、避難する場所とかが

あるかもしれない」

美緒「……」

高田「警察に行こう」

高田、ガーゼの上から包帯を巻く。

高田の手に水滴が落ちる。

美緒、泣いている。

高田「……」

美緒、ぼんやりと車内を見回す。

洗濯物や食器が収まった棚。

小さな冷蔵庫。

美緒「（手話）ここで暮らしてるんですか？」

高田「まあ……」

美緒「（手話）広いんですね」

高田「もう、おんぼろだよ」

美緒「（手話）さっきは、家の近くにいたんですか？」

高田、あいまいに頷く。

美緒の服は血で汚れている。

高田「（手話） टीーシャツも買ってきたから、着替えた方がいいよ」

高田、美緒に टीーシャツを差し出す。

美緒、慌てて「ごめんなさい。お金！」と手話する。

高田「いいよ、そんなもの」

美緒、ポケット等に手を入れてから、暗い顔でため息をつく。

美緒「（手話）全部、置いて来ちゃった……」

高田「（手話）気にしなくていい。それより、これからどうする？」

美緒、黙ってタオルを握り締める。

美緒「（手話）実家に行こうと思うんです」

高田「（手話）実家？」

美緒「（手話）母が、一人で住んでるんです」

高田「（手話）どこですか？ 送って行く」

美緒、頭を振る。

美緒「（手話）とんでもないです」

高田「（手話）別にいい」

美緒「（手話）だって、お仕事は？」

高田「（手話）有休も溜まってるし。このま

ま車で行こう」

美緒「（手話）だけど……」

美緒、迷うように目を伏せる。

美緒「（手話）やっぱり、いいです。迷惑か

けられないし。電車賃だけ貸してもらえま

せんか？」

高田「……」

高田、夏美の写真を見せる。

高田「（手話）こいつ、俺の妻も耳が聞こえ

なかった」

美緒「！」

高田「（手話）高校からの付き合いで、手話はこいつに教えてもらった。10年以上使ってなかったけど、覚えてるもんだな」

美緒「（手話）今は、奥さんは……？」

高田「死んだ」

美緒「！」

高田「だから……」

高田、美緒を見つめる。

高田「（手話）放っておけない。一人で行かせられない」

美緒、手を合わせて「すみません、ありがとうございます」と手話する。

高田「（手話）実家、どこ？ 市内？」

美緒「（手話）函館の、恵山岬の近くです」

高田、はっとして目を見開く。

高田「函館……」

高田、立ち上がって美緒に背を向ける。

美緒、身震いをしてくしゃみをする。

高田「寒かったら布団に入っていていい。あんまり綺麗じゃないけど」

美緒、頭を下げて、ベッドに入る。

高田、エンジンをかけて暖房をつける。

高田、ハンドルに手を置き、じつと前を見つめる。高田、振り返る。

美緒、布団にくるまっている。

高田、一瞬目を瞑り、開ける。高田、立ち上がり、夏美の写真を手取る。

高田「（小声で）……ごめん」

高田、写真を引き出しに仕舞う。

高田、運転席に座り車を発進させる。

○道 車内（朝）

高田、車を運転している。

新しい टीーシャツ を来た美緒がやって来て、助手席に座る。

高田「まだ、寝てていい」

美緒、頭を振る。

美緒、膝を抱えて身を小さくする。美緒、サンバイザーの裏の鏡に自分の顔を映す。目が腫れ、唇が切れている。

高田「痛むか？」

美緒、俯いて頭を振る。

「函館方面」と書かれた看板。

海の写真がある。

高田、ハンドルを握り締める。

突然、美緒が高田の腕を掴む。

高田「え！？」

美緒、走って車の奥のトイレに駆け込む。嘔吐する音。

高田、素早く辺りを見回す。

大きなショッピングセンターがある。

高田、駐車場に車を入れる。

○ショッピングセンター 女子トイレ前

高田、廊下に立っている。高田、心配

そうに女子トイレを見つめる。

美緒がふらふらと出て来る。

高田「（手話）やっぱり、病院に行った方が

いい」

美緒、力なくベンチに座る。

美緒「（手話）怖いんです」

高田「（手話）何が？」

美緒、体を抱きしめる。

美緒「（手話）これからどうなるのか……」

高田「（手話）お母さんに会って、それから

ゆっくり考えればいい」

美緒、顔を触る。

美緒「（手話）母、病気なんです。こんな顔見たら、倒れるかもしれません……」

前を通った客が、美緒の腫れた顔や腕に巻かれた包帯を見てぎよつとしている。

○同 婦人服売り場

美緒、服を見ている。高田、帽子を手に取る。

○同 通路

帽子とマスクをつけ、パーカーを着た美緒。高田と一緒に歩いている。

高田「もう昼か」

高田、辺りを見回しながら歩く。

高田「何か食べないと」

高田、振り返ると美緒がぼんやりと立ち止まって映画館の看板を見ている。

○映画館 シアター 前

映画のポスター。高校生が自転車に二人乗りしており、「花言葉の約束」と言うタイトルが書かれている。

○同 シアター 中

中学生や高校生のカップルが座っている。美緒、きよろきよろと館内を見回している。高田、ポップコーンと飲み物を持ってやって来る。

高田「若い客ばっかだな。この時間、これしかやってないみたいだ……」

美緒「（手話）大丈夫です。これがいいんです」

美緒、嬉しそうに頷く。

高田、ポップコーンを指差す。

高田「腹減ったでしょ。こんな物しかなかつたけど」

美緒、嬉しそうにキャラメルを指差す。

美緒、恥ずかしそうに俯く。

美緒「（手話）すみません、はしゃいじゃって。映画館なんて久しぶりで」

高田「俺も……」

美緒「？」

高田「あいつと来て以来だな」

美緒「（手話）奥さんですか？」

高田、頷く。

美緒「（手話）洋画？」

高田「（手話）ああ、字幕が無いと、あいつは分からないから」

美緒、頷く。

美緒「（手話）羨ましいです。奥さんとの素敵な思い出があって」

館内が暗くなる。

○ガソリンスタンド フィールド（夕）

宮地、車の整備作業をしている。男性従業員が通りかかる。

宮地「おい、信司がやる予定だった車検、お前やってくれるか？」

男性従業員「了解です。にしても珍しいですよね、信司さんが休みなんて」

宮地、嬉しそうに腕組みをする。

○ショッピングセンター 映画館 中（夕）

画面に抱き合っている高校生が映っている。観客、すすり泣いている。

高田、寝ている。高田、頭がガクッと落ちて、目を開ける。高田、隣的美緒を見つめる。

美緒、泣いている。

○同 駐車場（夕）

高田と美緒、歩いている。美緒、大切にそうに映画のパンフレットを胸に抱い

ている。高田と美緒、車に乗り込む。

○同 車内（夕）

高田、運転席に座る。美緒、助手席に座る。高田、あくびをする。

美緒、高田を軽く睨む。

美緒「（手話）高田さん、寝てませんでした？」

高田「いや」

美緒「（手話）じゃあ、映画の覚えてる所言つて下さい」

高田「（手話）主人公が万引きする所」

美緒「（手話）それ、始まって10分も経ってないじゃないですか！」

くすくす笑う美緒を見て、高田も微妙かに笑う。

高田、車を発進させる。

○道 車内（夕）

高田、運転している。美緒、窓の外を

見つめている。

高田「着くのは夜になるな」

パトカーが走って来る。美緒、シートに身をうずめる。赤信号で車が止まる。パトカーとすれ違う。美緒、きつく目を瞑る。美緒、息が荒くなる。

高田「？」

美緒「（手話）やっぱり私、ここで降ります」

高田「何で？」

美緒、車を降りようとする。

高田「どうしたんだ！」

高田、美緒を止める。

美緒「（手話）このまま行く訳にはいかないんです」

高田「どういう事？」

美緒「（手話）私、やっぱり母に迷惑はかけられない」

美緒、車を降りる。高田、慌てて車を路肩に止めて美緒を追う。

○道（夕）

高田、美緒の手を掴む。

高田「（手話）どこ行くんだ、その怪我で！」

美緒「（手話）放っておいて下さい。高田さんにも迷惑かけたくないんです」

高田「迷惑？ 迷惑って……」

美緒「（手話）ありがとうございました。ここからは一人で行きます」

高田「何があったんだ」

美緒「（手話）……ごめんなさい」

美緒、高田の手を振り切る。

高田「待て！ 分かったから！」

高田、美緒の手を掴む。

○キャンプ場 全景（夜）

「癒しの森」と書かれた看板。

○同 管理棟 前（夜）

キャンピングカーが止まっている。車の中に美緒が座っている。

○同 中 受付（夜）

高田、管理人からクーラーボックスと炭、毛布やタオルを受け取る。

管理人「火の始末には十分気を付けて下さいね。お風呂は夜1時まで。明日は10時チエックアウトです」

○同 コテージ 前（夜）

丸太で作られたコテージ。キャンピンググカーが止まっている。

高田、バーベキューコンロに火を起こしている。美緒、所在なさげに座っている。

高田「とりあえず、今日はここに泊ろう。実家には帰れないんだろ？」

高田、炭を追加する。火が燃え上がる。

高田「（手話）何があったんだ？」

美緒「……」

高田「（手話）もしかして、旦那が追いかけてくると思ってるのか？」

美緒「……」

高田「（手話）旦那からは、いつから暴力受けてるんだ？」

美緒「（手話）主人とは、最初に勤めた会社で出会いました。結婚した時は本当に優しかったです。でも……。去年急に仕事を辞めて。株を始めて。いつもイライラして、時々お酒飲んで暴れるようになって」

高田「……」

美緒「（手話）私、携帯を取り上げられて、家からも自由に出られなくなりました。ちよつと帰りが遅くなっただけで、誰と会ってたんだって疑われて」

高田「それで？」

美緒「（手話）それで私……」

美緒、手で顔を覆い膝に顔をうずめる。

高田「言いたくないことは言わなくていい。

俺もこれ以上は聞かない」

美緒「……」

高田「だけど一人で行かせる訳にはいかない」

美緒、顔を上げて手話をする。

美緒「（手話）映画、楽しかったです」

高田「そうか？」

美緒「（手話）あのまま時間が止まればいいの
のについて思いました」

高田「そんな、大げさな」

美緒「（手話）本当です。私、今日の事一生
忘れません」

高田は笑うが、美緒は真剣な顔。

○同道（夜）

高田と美緒、タオルを持って歩いてい
る。

家族連れが楽しそうに花火をしている。

高田と美緒、立ち止まってじっと見つ
める。

○同 温泉施設 女湯 露天風呂（夜）

自然に囲まれた露天風呂。

キャンプの利用客が入っている。

○同 脱衣所（夜）

美緒、壁に貼られた「お風呂の入り方」
を読んでいる。美緒、「浴用禁忌」の
「妊娠中の方はお気を付け下さい」と
書かれた部分を見つめる。

○同 コテージ 前（夜）

高田、バーベキューコンロの火の始末
をしている。コテージを見上げる。カ
ーテンの隙間から明かりが漏れている。

○同 コテージ 個室 中（夜）

ベッドや机があるこじんまりとした部
屋。美緒、ベッドに座り、泣いている。
美緒、お腹をさする。

大きくなくしゃみができる。美緒、窓枠に
近づく。高田が、鼻をこすりながらキ
ャンピングカーに入って行く。

○同 コテージ 前 車内（夜）

高田、洗面所で顔を洗っている。高田、
棚の引き出しを開けて、夏美の写真を
取り出し、じっと見つめる。

高田「お休み」

高田、ベッドに入り目を瞑る。

○（イメージ）海 浜辺

高田と夏美、手をつないで歩いている。

夏美、高田の手を離す。高田、振り返
って夏美を見つめる。

高田「どうしたんだよ」

夏美「（手話）あなたはあの人と一緒に
行っ
て」

高田「（手話）なんだよ、それ」

夏美、悲しそうに頭を振る。

夏美、高田の手を自分の頬に当てる。

夏美「（手話）私はもうずっとこの姿のまま
なの。いつまでも一緒には、いられない」

高田「いられるよ、ずっと」

「コンコン」とノックの音がする。

夏美、高田の頬を撫でる。

夏美の目に涙が浮かぶ。

「コンコン」とノックの音がする。

夏美、「ごめんなさい」の手話。

高田「なんで、謝るんだよ……」

ノックの音が大きくなっていく。

高田、はっとして振り返る。

○キャンプ場 コテージ 前 車内（夜）

高田、ベッドの上で起き上がる。

「コンコン」とノックの音がする。

美緒が窓を叩いている。

高田、慌ててドアを開ける。

高田「どうした！？」

美緒「（手話）眠れなくて……」

美緒、車に乗って来る。

高田「傷が痛むのか」

美緒、頭を振る。

高田「（手話）こっちの方が落ち着くなら、俺がコテージで寝る」

美緒「（手話）怖いんです」

高田「（手話）怖い？」

美緒、震えている。

美緒「……」

美緒、自分の体を抱き締める。

美緒「（手話）奥さんの事、聞いてもいいですか？」

高田「……」

美緒、慌てて「ごめんなさい」の手話。

高田「（手話）俺は元々、こっちの人間じゃないんだ」

美緒「？」

高田「（手話）俺もあいつも福島出身で、あの震災の時に津波に巻き込まれた」

美緒「！」

高田「（手話）あいつはお腹に子供がいたけど、津波にやられて……」

美緒「（手話）もういいです、ごめんなさい」

高田「いや……」

高田、夏美の写真を見つめる。

高田「（手話）俺は仕事場が海から離れてたんだ。あいつはきつと、防災無線なんか聞こえてないだろうから、急いで助けに向かった。だけど、渋滞で間に合わなくて。津波はあつという間にやって来た……」

美緒「……」

高田「（手話）最初は避難所とか仮設にいたけど、普通の生活してると、頭がおかしくなりそうになるんだ。あいつは死んだのに、何で俺は、って……。だから俺はこの車であちこち転々としてる」

美緒「……」

高田「俺、あいつが最後、どんな風に死んだかも分からないんだ。いつも一緒にいたのに。あんなにいつも一緒に……」

美緒「……」

高田「ずっと海の近くは避けて生きて来た。海を見ると、あいつのことを思い出すから」

高田、辛そうにうめき声を上げる。

美緒、思わず高田の手を握る。

美緒、夏美の写真を見つめる。

美緒「（手話）私も、お腹に赤ちゃんがいるんです」

高田「！」

美緒「（手話）この子だけは守りたい」

高田「……」

高田、黙って美緒に布団をかける。

高田「もう寝ろ」

美緒のすすり泣く声がだんだんと小さくなる。美緒の寝息が聞こえてくる。

高田、じっと宙を見つめる。

○同 コテージ 前（朝）

薄暗い森の中。鳥達が鳴いている。朝日が昇りかけている。

○同 車内（朝）

美緒、ベッドに寝ている。高田、床に座っている。

高田、美緒に布団をかけ直す。

○同 コテージ ダイニング（朝）

高田、肩からタオルをかけて風呂場から出て来る。美緒、入って来る。

美緒「おはようございます」と手話。

高田「起きたのか」

美緒「（手話）私ご飯、作ります」

高田「（手話）無理しなくていい」

美緒「（手話）助けてもらった、お礼」

美緒、台所に立つ。

高田、椅子に座ってテレビをつける。

ニュース映像。

アナウンサーの声「昨日未明『妻に刺された』

と言う通報が入り、救急隊員が自宅に行つた所、自営業の伊藤健介さん35歳が血流して倒れているのを発見しました」

高田、目を見開いてテレビを見つめる。

伊藤の自宅が映っている。

美緒は気づかず料理をしている。

アナウンサーの声「伊藤さんは病院に運ばれましたが、意識不明の重体です。警察は、

行方が分からなくなっている妻の伊藤美緒

容疑者を……」

美緒「（手話）高田さん、卵は目玉焼きがい
いですか？ それとも」

高田「……」

高田の様子に、美緒もテレビを観る。

美緒、顔面蒼白になり、リモコンを取
ってテレビを消す。

高田「（美緒を見る）……」

美緒、部屋を飛び出す。

高田、追いかける。

○同道（朝）

美緒、林の中を走っている。高田、追
いかけている。

高田「待て！」

美緒、転ぶ。高田、慌てて駆け寄る。

高田、美緒を助け起こす。

高田「おい……」

美緒、頭を振る。

高田「お前」

美緒、震える手で手話をする。

美緒「（手話）包丁で刺しました」

高田「！」

美緒「（手話）あの人に、妊娠したって言ったんです。そうしたら、許さないって、お腹を殴られそうになって」

高田「（手話）それで？」

美緒「（手話）どうなったのか、分からない……。血がたくさん出て。私、もし警察に捕まったらと思ったら怖くて……」

美緒、お腹を押さえる。

美緒「（手話）怖くなって、逃げました……」

高田、目を見開いて美緒を見つめる。

○ キャンプ場 コテージ 前 車内（朝）

高田、運転席に座っている。

美緒、助手席に座っている。

高田、ラジオのニュースを聞いている。

高田のスマホが鳴る。スマホには「ス

タンド 宮地さん」と表示されている。

高田、スマホの電源を切る。

美緒「（手話）どこかで降りして下さい」

高田「どうするんだ？」

美緒「……」

高田「警察に行くのか？」

美緒、頷く。

美緒「（手話）警察に行く前に母の所へ行きます。全部話します。この子の事、託したいから」

高田、苦しそうに美緒を見つめる。

○道（朝）

高田のキャンピングカーが走っている。

○同 車内（朝）

高田、運転している。

美緒、助手席に座っている。

美緒「（手話）駅で降りして下さい」

渋滞しており、車が止まる。

美緒「（手話）ここで降ります」

クラクション。高田、車を進める。

またすぐ止まる。

美緒「（手話）高田さんに助けてもらったこ

とは、警察には話しません」

高田「そんなことはいいんだ……」

美緒「（手話）高田さんも、誰にも話さない

で下さい。迷惑、かけたくないから」

また車が止まる。美緒、ドアを開けよ

うとする。高田、美緒の手を掴む。

高田「待て！」

美緒「！」

高田「（手話）二人で逃げよう。子供は二人

で育てればいい」

美緒「……」

高田「生半可な気持ちで言ってる訳じゃない。

どこかに隠れて暮らして、子供が産まれた

ら2人で育てればいい」

美緒「（手話）無理です、そんなこと。警察
に行きます」

高田「だめだ！　もし旦那が生きていたら、
ずっと怯えて暮らさないといけないんだぞ」

クラクション。

高田と美緒、見つめ合う。

高田「それに……」

再びクラクション。

美緒「？」

高田「もう、会えなくなるのは嫌なんだ」

再びクラクション。

しびれを切らした後続車が、高田の車
を追い抜いて行く。

美緒「（手話）私の事は、忘れて下さい」

高田「俺は……」

美緒「（手話）私はあなたの奥さんじゃない」

高田「！」

美緒「（手話）あなたは私を奥さんと重ねて
いるだけじゃないですか？　耳が聞こえな
い私を」

高田、ハンドルを握り締める。

美緒、再びドアを開けようとする。高

田、美緒の腕を掴む。高田と美緒、もみ合う。男性の声がする。

高田、眉を顰めて前方を見つめる。

○同 検問 前（朝）

パトカーが止まっている。警察官が車を止めて、一台一台、検問をしている。

○同 車内（朝）

高田と美緒、目を見開く。

高田「検問だ！」

美緒「（手話）警察？」

高田、頷く。

美緒、観念した様に肩を落とす。

美緒「（手話）私、行きます」

高田「……」

美緒「（手話）ありがとう。さようなら」

美緒、車から出ようとする。

高田、美緒の腕を掴む。

高田「だめだ、行かせない！」

高田、美緒の手を引っ張って車の奥へ連れて行く。

○同 検問 前（朝）

高田達の3台前の車を、警察官が調べている。

○同 車内（朝）

高田、美緒を連れてベッドの前に行く。

高田、ベッドマットを持ち上げる。美緒、必死で「何してるの!？」と手話。

高田、マットの下に入っている毛布やタオルを出す。

高田、美緒をその中に押し込める。

美緒「やえて!（やめて!）」

高田、手話。

高田「（手話）もう会えなくなるぐらいなら、今ここで警察を刺して逃げる」

美緒「!？」

高田、棚の引き出しから、ナイフを取

り出し、ポケットに入れる。

美緒、激しく頭を振る。

高田「（手話）今出て行ったら、俺も共犯で捕まる。それでもいいのか？」

美緒「！」

高田、人差し指を唇の前に立てて、ベッドマットを下ろす。

○同 検問 前（朝）

高田達の2台前の車を、警察官が調べている。

○同 車内（朝）

高田、車内を見回す。美緒の靴が床に置きっぱなしになっている。高田、慌てて靴を拾い、タオルでくるんで隠す。

○同 検問 前（朝）

高田達の前の車を警察官が調べている。

○同 車内（朝）

高田、運転席に戻る。警察が近づいて来る。警察官が窓をノックする。

高田、窓を開ける。

警察官「すみませーん、検問です。今、何されてました？」

高田「……下着が干しっぱなしだったので、仕舞いました」

警察、車の中をじろじろと見る。

警察官「免許書、拝見出来ますか？」

高田「……はい」

高田、咳払いをして財布を取り出す。免許書を警察官に渡す。警察官、鋭い眼差しで高田を見つめる。

警察官「……はい、結構です」

高田、手の汗をズボンで拭う。車の中から『ゴトツ』と物音がする。高田、体が強張る。警察官、車の中を見る。

高田、ポケットに手を当てる。

警察官「キャッシングカーですか。大きいで

すね」

高田「まあ」

警察官「お一人ですか？」

高田「はい」

警察官「お住まいは、あれ？ 福島の方です

よね？ 失礼ですが、こちらへはご旅行

で？」

高田「そんなようなものです」

警察官、じっと高田を見つめる。

警察官「ちよつと中、拝見してもいいですか

ね？」

高田「……はい」

高田、ドアを開ける。警察官が乗り込
んで来る。

警察官「すごい、台所もついてるんですね」

高田「何か、事件ですか？」

警察官「ええ、まあ。今日のご家族は？」

高田「いえ、いません。一人です」

警察官「お一人でこういう車って言うのは珍

しいですね」

警察官、無線で小声で何か言う。もう一人の警察官が、車に近づいて来る。高田、ポケットに手を入れる。二人の警察官が、顔を見合わせて頷き合う。

車内にいた警察官が、ベッドに近づく。高田、唇を噛み締める。警察官が、ベッドに手を触れようとする。

高田「触らないで下さい！」

警察官、驚いて高田を見つめる。

高田「……12年前の震災で、妻と子供を亡くしました」

警察官、はっとして高田を見つめる。

高田、棚の上の夏美の写真を手に取る。

高田「妻と、お腹の中の子供は津波に流されて死にました。この車には妻との思い出が詰まってるんです」

警察官「……」

高田「家も流されて、妻との思い出が残っている場所は、もうここだけなんです」

警察官、高田の方に向き直る。

警察官「それは……」

高田「……」

警察官「大変でしたね。実は私も親戚を亡くしてまして。お気持ち、お察しします」

警察官、高田に向かって敬礼する。

警察官「お気を付けて！」

警察官、車から出て行く。高田、ドアを閉め、大きく息を吐く。

高田、車を発進させる。

○田んぼ 道（朝）

一面に広がる田園風景。高田のキャンピングカーが走っている。

キャンピングカー、路肩に止まる。

○同 車内（朝）

高田、ベッドマットを持ち上げる。美緒、ベッドの下から這い出て来る。

高田「乱暴な真似をしてすまない……」

美緒、高田をビンタする。

美緒、高田のポケットに手を入れて、ナイフを取り出して床に投げ捨てる。

美緒、泣きながら高田を殴り続ける。

高田、黙って耐えている。

美緒「（手話） どうしてこんなことするの！

私はあなたを巻き込みたくなかったのに！」

高田「守るって決めたんだ」

美緒、へなへたと床に座り込む。

美緒「（手話） あなたも夫と同じなの？ 私を縛り付けたいだけ」

高田「違う！ 俺は……」

美緒、きっぱりと頭を振る。

美緒「（手話） 私の意志は、尊重してくれないんですか？」

高田「……」

美緒「（手話） 実家に連れて行って下さい。

母に話して、助けてもらいます。その後、警察に行きます」

高田、頭を振る。

美緒、床にあるナイフを拾って、自分の首に突きつける。

高田「やめろ！ 分かった、連れて行くから」

美緒、高田を睨みつける。

高田「お願いだ、ナイフを下ろしてくれ」

美緒の首に食い込むナイフ。

高田「頼む。もうこんな真似はしない。約束するから」

高田、頭を下げる。

高田「（手話）これ以上、君を傷つけるようなことはしない」

美緒、まだナイフを突きつけている。

高田「（手話）約束する。絶対だ」

美緒、ようやくナイフを下ろす。

美緒「（手話）もうあんなことしないで。私もあなたに傷ついて欲しくない」

高田、運転席へ行く。

美緒、助手席に座る。

高田、車を発進させる。

○美緒の実家 前の道

住宅街。大きな家が並んでいる。キャンピングカーがゆつくりと進行する。

○同 車内

高田、ゆつくりと車を走らせる。美緒、身をかがめている。

美緒、窓からこっそりと実家を見つめている。庭のある、大きな一戸建て。

高田「警察はいないみたいだな……」

家の前を通りかかる。門に、鯨幕がかかっている。

高田「葬式……？」

高田、美緒を振り返る。美緒、口を押えて家を見つめている。「立川百合儀葬儀式場」と書かれた看板がある。

美緒「……！」

高田「え？」

美緒、目を見開く。

○（フラッシュ）伊藤家 リビング（朝）

ソファに座っている美緒。伊藤が立っている。

伊藤「美緒、喪服ってどこにあるんだっけ」

美緒、うつろな目で伊藤を見つめる。

伊藤「明後日、通夜だそうだ」

○元の美緒の実家 前の道 車内

高田、車を運転している。美緒、泣きじゃくっている。

高田「どうした！？」

美緒、手話で説明しようとするが興奮していてままならない。

実家を通り過ぎると、横の細い道にパトカーが止まっている。

高田「頭、下げて！」

高田、平静を装って、通り過ぎようとするが、警察官と目が合う。

車の背後から、パトカーのサイレンが鳴り響く。高田、アクセルを踏む。

○道

高田の車が走っている。パトカーのサイレンの音。

警察官の声「（拡声器）その車、減速しな

さい！ 路肩に寄せて止まりなさい！」

高田の車、スピードを上げて走る。

○同 車内

高田、後ろを気にしつつ、必死で車を走らせる。美緒、手で顔を覆い、泣いている。

目の前に、海が広がる。

美緒、ハンドルに飛びつく。

車は大きく蛇行する。

高田「うわ！」

高田、必死に立て直そうとするが、出
来ない。

高田、ブレーキを踏む。

車はガードレールに当たって止まる。

美緒、車から飛び出す。

高田「美緒！」

高田、慌てて後を追う。

○海
砂浜

美緒、走っている。

美緒を追って、高田が走って来る。

目の前に海が広がる。

高田、目を細めて一瞬立ち止まる。

○同
海の中

美緒、海に向かって走って行く。

美緒、海に飛び込み、沖合に向かって

進んで行く。

高田「やめろー！」

美緒、海の深い方へどんどん入って行

く。高田、海に飛び込む。高田、美緒

に追いつき、美緒の腕を掴む。美緒、

逃れようともがく。高田、美緒の肩を

掴む。高田と美緒、見つめ合う。

高田「……」

美緒「……」

高田「本当に、そうしたいのか？」

美緒、頷く。

高田、しばし美緒を見つめる。

高田「死ぬなら、一緒に死のう」

高田、美緒の手を掴み、海の中に入っ
て行く。

○同 前の道

パトカーが止まる。警察官や刑事が降
りて来る。

○同 砂浜

警察官や刑事がやって来る。

○同 海の中

高田と美緒、海の中に沈んでいく。

美緒、波に流され、どんどん沈んでい
く。高田も、目を瞑る。

○（イメージ）海

海が荒れている。

夏美、波にさらわれている。

高田、夏美に向かって叫ぶ。

高田「夏美！」

高田、夏美に手を伸ばすが、届かない。

○元の海 海の中

高田、海底へと沈んでいく。

○（イメージ）海

夏美が、海に沈んでいく。

高田、夏美の方へ泳いでいく。

高田「夏美！」

高田、必死に夏美の方へ泳ぐが、夏美

は遠ざかって行く。波が高くなり、夏

美を飲み込む。

高田「やめろー！」

夏海の姿は海の中に消える。

○元の海 海の中

高田、水の中で目を開ける。

水面を目指して泳ぎ始める。

水面に顔を出し、息を吸って海の中に
潜る。

高田、海の中を見回す。

海の中に、美緒が見える。

高田、美緒の腕を掴む。

美緒を引っ張って水面へ上がろうとす
るが、思うように進まない。

息を吐き切り、苦しそうに顔が歪む。

高田、水面に向かって手を伸ばす。

○海面

数人の警察が海に飛び込んでいる。

船が集まり浮き輪等が投げ入れられる。

○青葉大学附属病院 全景

大きな病院。

○同 病室

高田、ベッドに寝て、点滴をしている。

看護師がやって来る。

看護師「高田さん、気が付きましたか！？」

今、先生呼んで来ますね！」

看護師、走って出て行く。高田、ぼんやりと天井を見上げる。

高田、はっとして起き上がる。

高田、点滴が外れるのも気にせず、部屋を出ようとする。

制服を着た警察官が飛び込んで来る。

警察官「動くな！」

高田、腕を拘束される。医師と看護師が入って来る。

医師「高田さん！？」

警察官と医師の手で、ベッドに寝かされる高田。

医師「動かないで下さいよ。あなた、心臓が止まってたんですからね」

医師、高田の脈などを測っている。

高田「み、美緒は……」

医師と看護師、顔を見合わせる。

看護師「あの方も助かりましたよ。別の病院で処置を受けています」

高田、安心してぐったりと脱力する。

医師「とにかく絶対安静。その後、警察の人が聴取するって言ってるから」

高田、気を失う。

○警察署 全景（夜）

5階建ての建物。「函館中央警察署」と書かれた看板。

○同 留置所（夜）

鉄格子のはまった小さな部屋。高田、ベッドに座って宙を眺めている。

○地検 全景

7階建ての建物。「地方検察庁」と書かれた看板。

○同 取調室

机と椅子が置いてある簡素な部屋。高田と検事が向かい合って座っている。

検事「高田さんは、犯人の逃亡を手伝ったとして、犯人隠避罪に問われています」

高田「……はい」

検事「これからお話を聞かせていただいで、拘留期間を決めることになります」

高田「はい」

検事「では、まず伊藤容疑者との関係からお伺い致します」

検事、書類を見つめる。

検事「警察の取り調べでは、以前からの知り合いではなかったと言うことですね？」

高田「はい」

検事「なぜ容疑者と行動を共にされたんですか？」

高田「彼女を、助けたかったんです」

○警察署 面会室（夕）

透明のガラスで仕切られた部屋。高田と野田徳郎（53）が、ガラス越しに向かい合って座っている。

野田「これから高田さんの弁護を担当します、弁護士の野田です」

高田、ぼんやりと頭を下げる。

野田「大変でしたね。いやでも、とにかく命が助かって良かった」

野田、書類をめくる。

野田「あ、被害者の旦那さん、命は助かったんですよ」

高田「！」

野田「何とかね。今は病院で治療を受けています。良かったですよ。例え、正当防衛だとしても相手が亡くなってしまおうとね……」

高田「……」

野田「高田さんは、最初は伊藤さんが逃亡しているとは知らずに一緒に行動してしまっていた、と言う事でしたよね」

高田「……はい」

野田「伊藤さんは、自分が無理やり頼み込
んで逃亡を手伝ってもらったと話しているよ
うです」

高田「……そうですか」

野田「で、今後の流れですが」

高田「あの」

野田「はい？」

高田「伊藤さんに、面会は出来ないでしょ
うか」

野田「面会、ですか。実は伊藤さんは切迫早
産で入院していましたね。まだまだ予断を
許さない状況です」

高田「……」

野田「いや、母子共に命が助かっただけでも、
奇跡なんですがね。それに、共犯者との共
謀が疑われているので、接見禁止になっ
ているんですよ」

高田、はっとして顔を上げる。

高田「共謀……」

野田「と言っても、状況から言っただけに嫌

疑は晴れると思いますから安心して下さい」

高田「……」

野田「今は、伊藤さんが殺意を持って刺したのかどうか争点になっていきますね。例えば、殺意があつて刺したとしても、暴力をふるわれていたと言うことで情状酌量はされるでしょうがね」

高田、頭を振つてため息をつく。

高田「子供は、産めるんでしょうか？」

野田「ええ、大丈夫ですよ。裁判で判決が出るまでは一般の方と同じように治療を受けられますからね」

高田、俯く。

○ガソリンスタンド フィールド

髭が伸びた高田、入って来る。宮地と美子が、駆け寄って来る。

美子「信ちゃん！」

高田、宮地に深く頭を下げる。

美子、涙ぐんでいる。

美子「信ちゃん、大変だったね」

宮地「もういいのか？」

高田「はい。取り調べは終わりました。逃亡の危険がないってことで釈放されて……」

宮地「そうか」

高田「ご迷惑、おかけしました」

美子「謝ることないわよ！ 信ちゃんは知らないで協力しちゃってたんだから」

高田「いや……」

美子「いい？ 気にしないの！ これからもうちで働くのよ。いいわね？」

宮地、高田に向かって手招きをする。

○同 建物内 事務所

古い椅子と机がある。高田と宮地、向かい合って座っている。

宮地「お前、何ですぐに警察に届けなかった？」

高田「……」

宮地「前から、知り合いだったのか？」

高田「……」

宮地「この辺のやつらは、お前とあの容疑者が、前から出来てて、一緒に殺したんじゃないかって噂してるよ」

高田「それは違います」

宮地「弁護士の先生は何て言ってるんだ？」

高田「俺は、犯人隠避罪で裁判にかけられるそうです。だけど、執行猶予はつくだろうって言われています」

宮地「相手の女性は？」

高田「切迫早産で入院したそうです」

宮地「そうか……」

宮地、ため息をつく。

宮地「その女性と、一緒に死のうとしたって言うのは本当なのか？」

高田「……」

宮地、テーブルに茶封筒を置く。

宮地「これ、少なくて悪いけど」

高田「……」

宮地「あいつはああ言ってるけど、やっぱり

な。変な噂も流れちまったしな……」

高田「いえ、申し訳ありませんでした」

宮地「残念だよ」

高田、ポケットから間取り図を取り出して、テーブルに置く。

高田「いろいろ良くしてもらったのにすみませんでした。長い間、お世話になりました」

高田、深く頭を下げる。宮地、高田の肩を叩き、立ち去る。

美子の声「どうしてよ!?　なんで、辞めさせたりするのよ!?!」

高田、茶封筒を持って立ち上がる。

○道の駅 駐車場（夕）

高田のキャンピングカーが止まっている。

○同 車内（夕）

高田、ベッドで寝ている。

○（イメージ）海の中

海に沈んでいく夏美。高田、手を伸ばすが届かない。夏美、どんだん海の底へ沈んでいく。

○（イメージ）学校 体育館 中（朝）

高田、出入り口に立っている。
床にブルーシートが広げられ、毛布やビニールに包まった遺体が並べられている。

人々が、遺体の顔を確認している。
高田、一人の遺体の前で立ち止まる。
毛布から出ている細い足。
高田、震える手で毛布を触る。高田、そっと毛布をはぐ。

○道の駅 駐車場（夜）

キャンピングカー車内。
汗だくの高田、ベッドの上で身を起こす。高田、肩で息をしている。高田、棚の上の夏美の写真を見つめる。

○山道 車内

キャンピングカーが止まっている。高田、運転席に座っている。高田、腕時計を見つめる。高田、車の外に出る。

○同道

街全体が見渡せる。高田、じっと街を見つめる。街中に、スピーカーから声が響く。

アナウンス「12年前、未曾有の大震災が起こりました」

○街道

路肩に車が停車し、人々が降りて来る。アナウンス「この震災によりかけがえのない多くの命が失われました」
人々が、空に向かって合掌する。

○海 船着き場

船に乗っている漁師達、じっと海を見

つめている。

アナウンス「この震災により犠牲となられた
全ての方々に対し哀悼の意を表します」

漁師達、合掌する。

○山道

高田、じつと街を見つめている。

アナウンス「まもなく、震災発生時の時刻と
なります。（電子音）黙祷」

高田、合掌する。次第に肩が震え、鳴
咽しながらキャンピングカーのドアを
開けて乗り込む。

○同 車内

高田、床にうずくまる。高田、夏美の
写真を胸に抱く。

高田「ごめんな、夏美……。ごめん……。守
ってやれなくて、ごめん」

高田、床を拳で叩き、声を殺して泣く。

○河川敷（夜）

段ボールを敷いて寝転んでいるホームレス達がいる。隅に、高田のキャンピングカーが止まっている。

○同 車内（夜）

ゴミで散らかった車内。髭が伸びた高田。高田、食器棚から食器を取り出し、段ボールに詰めている。

高田、ベッドマットを持ち上げる。中のタオルや毛布を取り出し、段ボールに詰める。高田、空いたスペースをじっと見つめる。

高田、ため息をついてベッドマットを元に戻す。

○ショッピングセンター 全景（朝）

まだ薄暗い空。大きなショッピングセンター。車の無い駐車場。

○同 店内 廊下（朝）

オープン前の人気の無い店内。制服を着た高田を始め、数人のアルバイトが掃除をしている。

高田、掃除機をかけている。床にゴミが落ちている。高田、拾う。映画のチラシ。「花言葉の約束」と書かれている。

○同 映画館 前

家族連れやカップルで賑わっている。

○同 チケット売り場

高田、店員のいるカウンターの前に立っている。高田、「花言葉の約束」と書かれたパネルを指差す。

高田「これ、大人一枚」

店員「ありがとうございます。1,900円です」

高田、ポケットからくしゃくしゃのお札を取り出し、支払う。

○同 シアター 中

若いカップルがぽつぽつと座っている。スクリーンに映画が映っている。高校生のカップルが告白したり、抱き合ったり、花束を渡したりしている。

高田、ぼんやりと画面を見ている。高田、隣の空席を見つめる。

一瞬、美緒の姿が浮かぶ。

高田の目から涙が溢れる。

○裁判所 法廷

小さな法廷。高田、被告人席に立っている。裁判官、野田、検事等が座っている。

裁判官「懲役1年。執行猶予3年とする」

高田、俯いて目を瞑る。

○同 前

高田と野田、歩いている。

高田「いろいろとありがとうございました」

野田「何か困ったことがあったら、いつでも
おっしゃって下さい」

高田「あの……」

野田「伊藤さんの事ですか」

高田「……」

野田、眉を寄せる。

野田「なかなか体調が思わしくないみたいで
すね。お母様も亡くなって、お一人になっ
てしまったみたいですし」

高田「……もし刑務所に入ることになったら、
子供は、どうなるんですか？」

野田「お身内が誰も引き取らないとなると、
施設に預けられることになるでしょうね」

高田「面会は、難しいですか？」

野田「裁判が終わるまでは」

高田、俯いて唇を噛み締める。

野田「お手紙でしたら、お届け出来ると思ひ
ますよ」

高田、はっとして野田を見る。

○道

高田のキャンピングカーが走っている。

○同
車内

高田、じつと前を見つめて運転している。「富岡町 251E」の看板。

高田の額に汗がにじむ。

○（フラッシュ）海

大きな津波が来ている。

○道
車内

高田、運転している。肩で息をしている。

道の脇には「復興の町 富岡町」と書かれている。

○（フラッシュ）海沿いの街

津波から逃げ惑う人々。

○道 車内

高田、運転している。

「がんばれ！富岡町」と書かれた看板。

高田、ハンドルをぎゅっと握り締める。

○海 砂浜

キャンピングカーが止まっている。

花束を持った高田、ゆっくりと歩いて
いる。

高田「久しぶりだな」

高田、海を見つめる。

高田「花なんて、買ったことなかったよな」

高田、辛そうに海を見つめる。

高田「俺はお前とずっと、一緒にいたかった
よ。助けてあげられなくて、ごめんな」

高田、花束を海にそっと浮かべる。

高田「忘れないよ。だけど、ちよつとだけ前
に進もうと思うんだ」

花束が波に乗り、沖合に流されて行く。

高田、花束が消えて見えなくなるまで、

見つめ続ける。

○本屋 文具売り場

高田、真剣にレターセットを選んでいく。

○道の駅 駐車場（夕）

高田のキャンピングカーが止まっている。

○同 車内（夕）

高田、机で便箋に文字を書いている。机には小さな花瓶に花が飾ってある。

高田の声「弁護士の先生が、手紙を届けると言ってくれたから書いています。あんまり体調が良くないと聞いたけど……」

○病院 病室 前（夕）

刑務官が立っている。

○同 病室 中（夕）

個室。美緒、ベッドに寝て窓の外を見ている。痩せて、生気の無い顔。

高田の声「あの時、『私を奥さんに重ねているだけ』と言われた時、ずっと君を妻に重ねていたことに気が付いた」

美緒、お腹をさすっている。

○道の駅 駐車場 車内（夕）

高田、机に向かい、便箋に文字を書いている。

高田の声「だけど今は、妻の代わりじゃなく、美緒と一緒にいたいと思ってる。今は辛いかもしれないけど、待っているから……」

高田、手を止める。高田、便箋を丸めてゴミ箱に捨てる。

高田、花瓶に差した花を一本手に取り、見つめる。高田、新しい便箋を出して文字を書き始める。

○病院 病室 中（朝）

美緒、ベッドに横になっている。手つかずの朝食が置いてある。刑務官がやって来る。

刑務官「伊藤さん。手紙が来てるわよ」

刑務官が手紙を差し出すが、美緒は受け取らない。

刑務官、ため息をついてテーブルに手紙を置き、出て行く。

美緒、うつろな目で封筒を見る。差出人に「高田信司」と書かれている。

美緒、慌てて封筒を開ける。

便箋が一枚出て来る。

「伊藤美緒様 子供の名前を教えてください。必ず、会いに行きます。高田信司」と書かれている。

押し花が一輪、貼り付けてある。

美緒の目に涙が溜まる。

美緒、箸を取り、泣きながらご飯を食べ始める。

○河川敷 全景

大きな川。桜が満開。

○刑務所 全景（夕）

高い塀に囲まれた、厳めしい建物。

○同 共同室（夕）

部屋の隅にトイレや洗面所がある質素な部屋。鉄格子のはまった、小さな窓がある。

何人かの女性囚人が、思い思いに過ごしている。

美緒、部屋の隅で手紙を読んでいる。手紙には、全て押し花が貼り付けられている。

美緒のお腹、大きくなっている。

美緒、立ち上がり、窓の外を見つめる。

夕日の中、鳥が飛んでいる。

美緒、目を細めて鳥を見つめる。

美緒、お腹をさする。美緒、「つばさ」

と、三文字の手話を作る。

○海 砂浜（夕）

キャンピングカーが止まっている。

夕日に染まった赤い海。

空に鳥が飛んでいる。

高田、鳥を見つめている。

高田、「つばさ」と、三文字の手話を

作る。高田、飛んでいく鳥を見つめる。

○空（夕）

鳥がどこまでも自由に飛んでいく。

○メインタイトル「翼」

了